

未来へ

尾崎潤子

都甲真紗子さんにはこれまで『白き春』『夏輝』『秋韻』の三冊の歌集があり、今回の『冬蕾』は第四歌集である。第二歌集の折りに「四季シリーズ」としての出版の誘いを受けて以来こころがけ、これが完結作となる。

作者は大正十二年満州生まれ。元号四代を生き継いでこられた。お子さんはなく、ご主人や血縁の方の多くはすでに他界されているが、姪御さんがその生活の内外の用を手助けされ、安堵の日々を送っていると聞く。

まずはこんな歌から。

体温の残るセーター たたみつつ温めてをり
みづからの掌を

脱いだばかりのセーターには自分の温もりが残っている。丁寧なたたみながらその温もりで掌を温めるのだ。ひとりであることをじんわりと噛みしめているような一首なのだが、どこか淡淡とした印象がある。

自由とは孤独ともなふ榿の実のひとり見つ
むる晩夏の入り陽

（寂死）と云ふ言葉生れし世 榿の実の独

り老いしがひとりを愛す

「ひとり」にかかる枕詞である「榿の実の」を使った歌が二首あった。一首目、晩夏の入り陽をひとり見つめている作者のシルエットが浮かぶ。上の句に詠まれているように、自由を選び取ったとき孤独は必ずついてくる。二つは表と裏なのだ。長く一人で暮らしてきた作者はそのことをよく解っている、という気がする。寂しさはあるのだろうか、負の部分もすべて受け入れて自分ひとりの二本の足で立つことを良しとしているのだと思う。二首目がその答えである。「寂死」という言葉についてはそのまま、寂しくて死んでしまうことと取った。たった独りで老いても、ひとりを愛しているのがある。都甲真紗子という人の高い精神性を感じる。

造幣廠ありし小倉が目標の原爆を代りに受
けし長崎

人ひとり住めぬ被災地の村はづれ辛夷はし
ろくこの年も咲く

マルチダウン建屋の始末如何にせむかかる
仕事を好む人なし

ヒロシマのフクシマの惨その次が在りては
ならず^や靡^やめよ原発

反戦、反核のテーマで歌を詠むとき、作者の熱量があきらかに上がるのがわかる。その一つの原因が一首目。昭和二十年八月九日、アメリカのB29がファットマンを載せてまず向かったのは小倉だった。小倉には西日本最大の兵器製造所があった。しかし雲が厚かったため投下場所を長崎に変更したのだという。作者は満州出身であるが引揚げ後長く住んだ小倉は第二のふるさとなのだ。その場所に原爆が……と思えば居ても立ってもいられないような気持ちなのだろう。二首目以降は福島原発事故を詠った一連から引いた。人の住めなくなつたところにも季節が移れば花は咲く。辛夷の白さが悲しみの象徴のように美しい。また、廃炉までどれだけかかるかわからない果てしない作業に関わる人々に思いを寄せている。そして四首目の強い言い切り、作者の本音の吐露だろう。略歴にあるように作者が講師を勤めた朝日カルチャーセンター北九州教室にて受講生とともに反戦反核の歌集を何冊か出版されていて、こうした行動力にも感服する。

この春、また平和が脅かされる事態となつた。ロシアによるウクライナ侵攻は四月初め現在、いまだ停戦には至つておらず、街は破壊され犠牲者や避難民の数も増す一方である。作者もどんなにか心を痛めていることだろう。一刻も早い収束を願うばかりだ。

薔薇のジャム秘薬のごとく作りつつ紅色う
すれゆくを惜しめり

余り種川原に播きし諸葛菜われの秘密がむ
らさきに咲く

乾きたる球根に芽のあをく出づ終りしもの
がつなぐ始まり
花ありて画家になつたとモノ言ひき花あり
て慰謝かぎりなしわれは

作者は花が好きなのである。一首目、「秘薬のごとく」がミステリアスな雰囲気醸し出す。美しい紅色がうすれていくのを作者はしみじみと惜しんでいて、ゆつくりとした時間を感じさせる歌である。二首目、こっそり蒔いた諸葛菜の種もやがて花を咲かせて人の目にとまる。「われの秘密がむらさきに咲く」という端的な表現がいい。三首目は枯れたように見える乾いた球根に出てくるあおい芽、小さな事実だがそこに作者は「終りは始まり」という意味を提示する。解つていくことなのだが深く納得させられる。四首目、睡蓮を生涯描き続けたモノを思いつつ自らの感慨を述べている。花によって慰められ生きる力を与えられたということなのだろう。

真つすぐに伸びてふくらむ冬^{とうらひ}薔^{らひ}の薔薇はあ
たらしき年に咲かむ

タイトルになつた一首である。歌集の帯にあつたこの歌を読んだとき、どれだけ勇気づけられたことだろうか。伸びやかに未来へ向かう作者の勁いメッセージである。コロナ禍になつて二年、容易に人と会えない閉塞された空気のなかで凝り固まっていた心がゆるゆるとほどけていくのを感じた。この歌の薔薇が多くの人々の心の中で花開くことを願っている。

茶色い瞳の人

浦部晶夫

『茶色い瞳』は、今井聡さんの第一歌集であり、二〇〇三年から二〇二一年までの短歌が収められている。今井さんは

一九七四（昭和49）年生まれなので、現在47〜48歳の働き盛りである。二〇〇三年にコスモス短歌会に入会し、二〇〇九年には「茶色い瞳」と題する連作により、「短歌現代」新人賞を受賞している。今井さんは奥村晃作氏に師事して作歌を続けており、この歌集も奥村さんの選を経て出版されたものである。

今井さんは東大法学部を卒業して会社勤めをしながら作歌に励んでいるが、今井さんの大学卒業後の社会情勢は、バブル崩壊後で日本経済の低迷期であり、華やかさに欠け、活気に乏しい状況だったようだ。

この歌集の特色として、いくつかの点を挙げる事が出来るので、順を追って取り上げることにする。

まず第一に、客観的に自己を見つめている歌に特長がある。

無精髭伸びるままにて内定後、初勤務前の
身を遊ばせる

顔を湯にあらひて拭ひむきあへば鏡の男茶

色い瞳をす

「茶色い瞳」は、「短歌現代」新人賞を受賞した時の連作のタイトルにもなり、本歌集の題名にもなったものである。自己を突き離して見ようという姿勢が感じられる。

孤独また孤立の味はいかばかりわが宿業と
つくづくと知る

社会あるいは会社の中で、孤立している訳ではないが、本人の孤独の自覚は作者特有のものである。

その反動として、通常の家庭に対する思慕がある。

「責任」とつぶやく友の顔見れば一児の父
の表情よ、羨し

子は母を幾たびも見上げお互ひを確かめる
ごと道をわたりぬ

買ひてきて活けたりしるきかすみ草ひとり
の部屋のともしびとなれ

一人暮らしの淋しさがある一方、幸せを感じる折々も当然
ある。

つぶらなるクロガネモチのあかき実を寒の

日にみつ幸ひを得て

まだ君につたへてをらず 秘することのや
がて伝へむ日はきたらむか

生きなさい 命の限り生きなさい 梅雨晴
れのそらの風は告げつつ

会社での生活は、作者の人生の重要なひとみである。

泣き言をいはず働くわがことを余裕ありと
ぞ見る幾人か

石ころのごとき言の葉つらねては報告文を
書き継げるなり

辞めゆかむひとぼつりぼつりその訳を語り
て降りぬ市ヶ谷駅で

障害者雇用にかかはる当部署にうつり七年
日々を苦しむ

実直な一人の人間が真面目に働いていることが伝わってくる。

一方、作者は、自然をやさしいまなざしで観察している。

空をゆく雲のかたまり裂けはじめ千切るる
ほどに緑の明るむ

鶴鶴が教ふる道をたどりつつ苑の御池にわ
れは来たりぬ

行く雲はをりをりに見す研がれたる刃のご
とき銀のかがやき

奥村晃作氏との師弟関係を詠った歌も忘れ難い。

とりわきて師恩忘れし罪ふかく己の頭蓋スカルば

かりみてゐつ

この師が奥村さんのことなのかどうかははっきりしないが、
次の二首は奥村さんである。

東上線下赤塚の駅前に師は自転車をこぎあ
らはれき

師とわれとに残る時間は短くておもひいで
らる師の優しさを

着眼の面白さから作者のやさしさが感じられる作品もある。

首の輪は締めて居れども三毛猫の顔に険し
く野良の気のあり

ティッシュもてコガネムシ包み扉のそとに
逃がしてやれば風音のする

なお、山崎方代を詠んだ歌が二首ある。
酒たばこのみ放題の方代と虚実絢交ぜのそ

の歌の華
月をみせ雲厚らなり掌てに豆腐載せゆくひと
は方代さんか

自分では真似の出来ない方代の生き方に共感する心情があ
るのだろう。

何だか窒息しそうな閉塞感のある社会の中で懸命に生きて、
歌を作りながら自己を見つめている作者の姿は、現代では余

りはやらないスタイルなのかも知れないが、一人の誠実な人
間の正直な生きざまが表現されている『茶色い瞳め』は、多く

の人の共感と感動を呼ぶに違いない。

大地に足を踏ん張る

米田郁夫

『雉子は走れり』は、喜多功氏の第二歌集。二〇一一年から二〇二一年までの四八六首を収める。喜多さんは一九三六年三重県の山近い農村の生まれ。歌集では現代を生きる一人の農民の生きざまがリアルに歌われている。

まず歌集のタイトルとなった次の一首から。

青光る尾羽を立てて直線に雉子は走れり朝
のくさはら

「尾羽を立てて直線に雉子は走れり」に勢いがある。それを受けて「くさはら」とひらがなを用い、やわらかな草原を、そして朝のすがすがしさを表す。前後の歌も、雉子のつがいの営みを優しい眼差しで詠まれている。ちなみに雉子は日本の国鳥で、山のほか野原や田畑周辺に生息する。なお第一歌集『蒼き断面』も「銃声の木霊の中へ雉子は落つ冬の檜原の蒼き断面」の雉子の歌からの歌集名である。

沢蟹が土間に入り来て藁打石を幾匹も越ゆ
雨続く日は

農家の土間の藁打ち石、雨の続く日はそこを沢蟹が越えて行くよ、と作者のまなざしは地べたにむけられ、小動物のい

のちまでこう歌われる。

TPPの得体の知れぬ津波くる恐れ抱きつ
つ種粃浸す

今秋の米のねだんは昨年より二割安なり食
つてはゆけぬ

TPPの論争さなかに下落一途米価恐ろし
田作りわれは

TPPとは「環太平洋パートナーシップ協定」の略称、「アジア太平洋地域の国々が関税をなくし貿易をしやすくする協定」のこと。これにより外国産の安い農作物が輸入される反面、日本の農作物の値段が下落する。農民は農機具代や肥料代に追われ経営が赤字となり、継ぐ人もいなくなつてしまう。農政の不備を衝く社会詠の三首。

ボタン一つ押せばこの星破滅するわが空想
を嗤はばわらへ

空想で済めばいいが、本当に核保有国の元首が間違つてボタンを押せば地球は壊滅する。現実は今、ロシアによるウクライナ侵攻が起こっているではないか。この歌には、作者だ

けでなく多くの人々の感じていることが表されている。

蛇が蛙をのすり驚が蛇を喰らふさま近くに見たり

野に働けば

田一面稲の花咲き静かなり神降り給ふ時間

と思ふ

一首目、このような食物連鎖の光景を目にするのは農をしていればこそ。二首目、風媒花である稲の花が咲くのは二時間あまり、風は強すぎても弱すぎてもいけない。その静かな時間はまさに神（稲魂うかのみたま）の降臨の時間であると歌う。これも農ならではの感覚なのだ。

ゐのししが暴れ食ひたる芋畑親子の足跡乱れあたらし

風雨の夜わが山畑の芋食らふ瓜坊ゆゑに許

すとするか

親子の猪のその乱れた蹄跡が新しい、という発見を歌う。

二首目、瓜坊なのだから、許してやろう、という。同じ地を生きるものへのこの視線に、私も感じるものがある。

日と土と雨の恵みを受け過ぎて冬の大根ね

だん暴落

暖冬はわが家の生活直撃すキャベツ白菜め

ちやくちや安い

暖冬は過ぎやすくありがたいものである。が、作物が育ちすぎて、結果値段が安くなる。大根だけでなくキャベツ白菜も。一首目、「恵み受け過ぎて」や二首目の「めちやくちや安い」に少し自虐めいたユーモアがあるようだ。

あくがれの晴耕雨読にほど遠し雨合羽着て
夏草を刈る

大規模農家の人でも晴耕雨読をする余裕はなかなかない。

まして梅雨の時期ともなれば、草はどんどん伸びていくのだ。私の父も百姓だったが、よく働いていたことを思い出す。

子を四人孫六人を現世うつしよに残して逝けり生き

たかりしを

百万円の時計をはめて田植機に早苗を植ゑ

る馬鹿たれ息子

一首目は妻を歌ったもの。一連には、葉桜の頃に曾孫が生まれるという歌もあり、子と孫を残して逝った妻への思いがひしと感じられる。二首目、息子の具体的な様子と親の気持ちと歌われていて面白い、と言えば失礼か。だが、集中にこうした歌があることで読者はひと息つける。

鉄塔と高圧線ですたずたに斬られし雲は北

へと奔る

歌集の最後を締めくくる歌。コスモス二〇二一年九月号、〈雲 フォト劇場〉の作者の文には、「雲は日蔭をつくる。野良で働く百姓には、三十五度を超えるあつさをやわらげてくれる。ありがたい存在だ。時には雨を降らしてくれる貴重な野の神さまだ。」とある。自然を相手に暮らす喜多功さんのこの文は、農のすべてを語っている。この歌集は、大地にしっかりと足を踏ん張る農の勲章である。なお、娘さんの書かれたあとがきによると、喜多さんは農作業中の怪我で入院中とのこと。早く回復されることを祈ります。

言葉にしないことば

田中愛子

『木道』は山田宗夫さんの第一歌集であり、昭和六三年から令和三年までの作品から五二六首を収める。古稀を過ぎて初めての歌集上梓という山田さんは、長く高校の教師をつとめられ、かたわら農業にいそしんでこられた。

『木道』全編をとおして伝わってくるのは、静かなやさしい空気である。それは作者自身の持つ空気であり、作者を取りまくひとびとの空気でもある。

わが足の冷たきをいふ妻は今日ひと日さびしく過ごしたるらし

青苔の庭を三毛猫わたりたり父の指し手を待てばのどけし

三貫の回転寿司に足る母が畳んだ札を握らせてくる

作者と家族との関係が詠われた三首である。一首目、奥さまが一日の寂しさをつぶやくわけではない。しかし夫の足に触れ、その冷たさに気がついたことから作者も妻の過ごした一日を推測するのである。二首目と三首目は、両親と過ごす静かでおだやかな時間の描写である。作者と両親とのやさ

しい関係が詠われている。二首目、「待てばのどけし」に、老父の指し手を待つ時間をのどかだと感じる作者の優しさにじむ。三首目からは、親子が相互に感じる切ないほどの愛おしさが伝わる。食の細くなった母に対する子の思いと、子に負担をかけまいと願う母の愛である。

玄関にわがわすれこし弁当を妻はさびしく
食みゐるらむか

耳とほき父と並木を歩くとき落葉ふむ音父
は聴くなし

せつかくの弁当を忘れてしまった。その後悔から、作者は妻の気持ちをも自然に思いやるのである。心地よく落葉を踏みながら歩いても、その音は父には聞こえないのだろう。ことばには出さないけれど父親の寂しさを思いやる。

教師としての作品には、生徒との距離の近さがうかがえるものが多い。

担任の少年と父子になりすまし割引の利く
芝居観にけり

一度だけ触れたかりしと卒業の子がわが坊

主頭撫でたり

一首目、生徒との共犯者めいた愉悦。「なりすまし」は、二人だけの秘密を作者も生徒も楽しんでるようだ。二首目、いくら卒業間近とはいえ、距離があれば生徒が教師に頭を触らせてくださいとは言えない。どちらも読んだあと読者が思わずほほ笑んでしまいそうな作品である。

英語部の子が雪の日のゆき見せてアフリカの子とテレビ会議す

アマゾンに本を購ふとき馴染みなる書肆の親爺のかんばせ思ふ

さりげない心遣いがにじむ作品である。生徒たちは、雪を知らない国の子どもたちに雪を見せてあげようという心遣いをする。もちろんそのことを彼らが口に出すわけではないけれど、教師である作者はその心遣いに気づいているのだ。

アマゾンなどネット通販は確かに便利である。居ながらにして注文ができて翌日には届く。そんな便利な世にあつてふと街の本屋さんの顔が目に見えなくなる。どこかうしろめたい気持ちにかられる作者。

ここまで見たように、この歌集は作者と作者を取りまく人々との間のやさしくあたたかい心の交流を表現することで成り立っているといってもよいであろう。しかし、詠いぶりにはあくまで冷静で、感傷は隠されている。歌集全体をおおう空気はさわやかに乾いているといってもよいだろう。

秘めて来しものむらむらと滲ませて枝ほの

紅く二月の桜

ひんがしにみじかくあをき流れ星晩節きよ
くわれのありたし

作者自身の内心を描き、あるいはその志をうかがわせる作品である。一首目は二月の桜に託して、作者自身、内心に秘めてきたものがあることを表出しているようである。二首目は、作者の気概を直接に示している。

そして、この二首でも明らかなように、作者の歌の内実を支えているのは端正で確かな描写の力である。

鬼やんま優々めぐりいでゆきぬ生徒らの眼
をしばらくうばひ

はるばるときて白鳥はみづうみに水切り石
のごと着水す

一首目、教室にトンボが迷い込んだのであろう。トンボの悠然たる飛翔、それを見つめる生徒たちの生き生きとした表情が目に見えるようである。二首目は、簡潔な描写の中に鳥の羽ばたきや水しぶきまでが表現されている。

山田さんは山歩きをなさるといふ。この歌集にも奥さまと山を歩く歌が随所に置かれている。歌集の表題がとられたのもそんな作品である。

木道の補修の杣をうつこゑが七島八島わた
りもどり来

七島八島は霧ヶ峰に近い湿原である。木道の杣を打つ声が響いて帰ってくる。高原のさわやかな風を感じさせる歌である。そんな風のなか山田さんは今木道を歩いている。そして、ときおり振り返って後ろの人に静かにほほ笑むのだ。

歌はセ・シ・ボン

海老原光子

『さくら変奏曲』は『歌の翼に』『雲のフェルマータ』に
 継ぐ江頭洋子さんの第三歌集。二〇一一年からの十年間、四
 五七首が収められていて、I「レガートの風」II「トレモロ
 の波」III「アンダンテ・カンタービレ」という大見出しで三
 部に分かれている。七十年余合唱を楽しみ、「短歌と歌は神
 様からの贈り物」と、いつもふたつの「うた」を心に置いて
 過ごされているという江頭さんらしい心憎い構成にまず感じ
 入る。

レガートにたちばな月の風ふけば庭のポピ

Iがほふほふわらふ

降る雨に檜の葉ゆれてリズム生る四分音符

また八分音符が

眼鏡橋の眼鏡のなかをトレモロのさざ波な

がるきらめきながら

江頭さんにかかる、風も波も雨もすべてが音源となるら
 しい。穏やかな五月の風にはふほふ揺れるポピ、作者もほ
 ふほふ笑っていいそうだ。檜の葉に降る雨が奏でる楽しげなり
 ズム、作者もまた一緒にハミングしていそう。眼鏡橋の下を

流れるさざ波のきらめきにきらきら心躍らせている作者……。
 「レガート」「四分音符」「八分音符」「トレモロ」といった音
 楽用語がとても効果的で読者も作者と一緒に風や雨、波、光
 を感じ共に楽しんでしまう。

万の花そよげばわが気満たしめてタクトを
 振らすさくら変奏曲

歌集のタイトルとなった一首。満開の桜の下で花びらを浴
 びながらにこやかにタクトを振る江頭さん、まるで花の精の
 ようである。

スパーで支払ふ九百九十九円ちやうどで

はないところが愉快

一点の雲なきけさの空ふかしされど全きは

不安のひそむ

歌集の随所に江頭さん独自の視線が見えて飽きないのだが、
 この二首も何ということもない日常を詠いつつ実は、完全な
 もの持つ危うさや不安、完全ではないものの魅力や安心感
 という江頭さんの人生訓のようなものが日常の何気ない具体
 や自然とを取り合わせてさらりと描かれているように思う。

一首目の九百九十九円という具体的な数字がほんとに愉快。

漢字にて書けば何とかなりさうでたのしく

なりぬ「二進も三進も」

鬱の字を覚えてしまへば何回も書くうち鬱

がたのしくなりぬ

「二進も三進も」にしても「鬱」にしてもマイナーな感情表現なのだがこのように詠われると江頭マジックにかかったように妙に納得させられてなんとも楽しく大らかな気持ちになつてしまふ。

老人性感謝症なり花みても菜を刻んでもおしゃべりしても

「老人性」と冠されるとほとんどの場合マイナスのイメージのことが多い。ところがどうだろう、意外にも「老人性感謝症」なのだという。米寿を迎えられるという江頭さん、これまでには悲しいことや辛いことも当然あつたはずだろうに、歌集の中のとんどの歌からは米寿を迎える人とは思えない少女のような明るさと清楚な魂があふれ出ていて、読む者を魅了するのは「ふたつのうた」の力とこの「老人性感謝症」ゆえなのかもしれない。

すり鉢のかたちに山の灯が徐々に増えてゆ

くなり長崎慕情

十八歳から長崎に縁があり、今もこれからもずっとこよなく愛し続ける長崎を詠った歌も多い。その中からの一首。すり鉢のかたちに徐々に灯が点つていく光景がいかにも長崎らしく、あの美しい長崎の夜景が目に見えるようだ。

老いの歌おほいにうたへ老後とは余生にあらず熟成のとき

どのやうに生きてもひと世口角を上げて歩かうかくかきくけこ

叩いても絞つても出ぬうた一首ほつとけほ

つとけ羊羹つまむ

Ⅲ部「アンダンテ・カンタービレ」から。音楽用語のアンダンテ・カンタービレとは歩くような速さで、歌うように、表情豊かにといいことらしい。これからの人生は急がずゆっくりのんびりと日々の生活や自然を楽しみながら……ということになるだろうか。老後とは余生ではなく熟成のときといひ切り、同じひと世なら口角をあげて明るく生きよう、なかなか歌がでなくても焦らずにじっくり構えてその時間をも楽しもうよ……そう諭されている気がして、すうつと気持ちも軽くなつてくる。

八十路超え息災なるはコーラスと短歌のち

から歌はセ・シ・ボン

『さくら変奏曲』の歌四五七首を読み終えて、なんだか気持ち浄化された気がする。なにごとにも前向きで明るい江頭さんの生き方にこれから先の自分の生き方を重ね、こんな風に齢を重ねていたらいいな、齢をとるのも案外悪くはないなと思わされた歌集であつた。

これからもふたつの「うた」の力で後に続く者たちに「うたの楽しさ」を謳歌してみせ、「人生讃歌」のタクトを振つて欲しいと心から願うばかりである。

泳いで渡る

原 賀 瓊 子

片岡絢さんが第二歌集を出した。第一歌集『ひかりの拍手』では、学生から社会人の生活十年を詠んだ二十代の片岡さんだった。今回の第二歌集『カノープス燃ゆ』では、勤めを続けつつ結婚し、一児の母となった絢さんだ。あっという間に過ぎた三十代と、自身「あとがき」で述べているが、十年を重ねた作者の目は明らかに深みを増して、ものの捉え方、描き方にいっそう個性が加わった。歌数は四七五首。それでは、まだ独身の頃の仕事の歌、恋の歌、思索の歌をアトランダムに抽いてみよう。

仕事とはきつといろいろ良い方へより良い方へ持つてく方
 身体は古びてゆくが知つてゐる（ほんとのわたし）に歳が無いこと
 舞ひあがる蝶は目撃してしまふ独りかがやく陽のさびしさを
 クロアチアビールを飲みて笑ひ合ふこんな日のため働いて来た
 どうしよう家に仕事に通勤に街に日本に飽

きてしまった
 はるかなる処より矢が放たれて地に突き刺さりをり曼珠沙華
 絡まつて寝れば手足は八つあり私の手だけ君の足だけ
 縦方向はリングと同じ引力で横方向はきみが引力

どの一首にも、片岡さんならではの眼と心が働いていて、現代人の硬い固定観念を取り払ってくれる。片岡さんの歌はとにかく発想が自由だ。発想は自由だが、底に、歌の器への敬意のようなものがあり、あくまでも言葉のリズムを活かす詠み口だ。そのことが魅力のある文体を生むのだろう。

全身で独身生活と向き合っていた作者は、結婚という新しい場面を迎えるが、結婚生活もまた片岡さん流で、日々の思いや人間関係の捉え方にまやかしくない。

「ワイシャツのアイロンがけをしてほしい」夫に言はれた妻の衝撃
 実母から「アイロンぐらいかけてあげた

ら」と言はれた娘の衝撃

義両親から「アイロンをかけてやってほしい」と言はれた嫁の衝撃

「ワイシャツのアイロンがけはしません」

と妻に言はれた夫の衝撃

夫がある日、アイロンがけをしてほしいと妻に頼む。そこから広がってゆく結婚生活の全容だ。個人と個人ではなく、家や役割という結婚のシステムへの「衝撃」を、作者は諷刺画風に四首に詠んでいる。読者の笑いを誘うこの豊かな視点も片岡さんの特徴だろう。歌集には、これ以降にもチラッチラツと夫君への違和感が顔を出すのだが、

〈夫への苛立ち〉有効活用はできないもの

か発電などに

と、桁ちがいの飛躍をした歌もある。

さて、絢さんは、ある朝、鳳凰の夢を見て、ひとつぶの命を宿す。いよいよお母さんになるのだ。

絶叫が陣痛室にこだまする はじめて聞いた

たわれの絶叫

崖に咲く眩しい花を摘み終へた分娩台の上

のわたくし

外食もいよいよ家の食事だな そんな顔して

乳を吸ふ子だ

ベランダの窓の向かうで炎天はゆつくり夜

を織り上げてゐる

レンコンをじりじり焼けばフライパンから

立ちのぼる秋の輪郭

おつぱいがおつぱになつてべになつてべ、と

言ひながら子は飲みに来る

トイレからリビングまでの数歩しかない廊

下でも子は手を繋ぐ

数人が死ねばただちに孤児となる子と歩き

をり地球の上を

子を育てながら片岡さんはどんどん成長する。炎天にも夜を見いだし、けむり立つ焼レンコンの輪郭から秋を感じる。子育ての喜びの奥にある、母としての最大の不安に気づいてもゆく。「数人が死ねば」、子供は「ただちに孤児となる」のだ。

秋空を鳥は歩いてのほりゆく わたしは町

を泳いで渡る

魂が肉を纏つてゐることがよくわかる春の

夕暮れである

『カノープス燃ゆ』は、母としての存在の実感を詠った歌集だが、片岡さんの生きる基底にあるのは、心とは別の動物としての魂だろう。魂を護るものとして肉体はある。だから人の歩みと、鳥が飛び魚が泳ぐことは同質なのだ。秋空を鳥は歩いてのほり、わたしは町を泳いで渡る。

結婚と子育てが、作者のこの態度に磨きをかけたことは確かだ、表題歌の死生観へ繋がってゆく。

人を恋ふときの眼差し 死を想ふときの眼

差し カノープス燃ゆ

声に出して読みたい歌集

大西淳子

『人間の声』は一九九八年から二〇二〇年まで（作者の年齢で言えば六六歳から八八歳まで）の作品、四二八首を収めた第二歌集である。

新劇に熱中してゐたあのひとはうそつきな
れど声のよかりき

声フェチといふならば言へ人間の声には三
世やどる気がする

歌集名に関連した二首。青春時代を回想する相聞歌である。「嘘つき」と「よい声」がせめぎ合い、最終的に声が勝利したようだ。自ら「声フェチ」を公言し、ひとりの人間の声にやどる遙かな神秘を感じている。

また、クラシック音楽も愛好しているようだ。

スペイン奇想曲流るる夜の部屋のなか孔雀

サボテン開きはじめつ

壮大な「スペイン奇想曲」と奇抜で華々しい「孔雀サボテン」。本来、無関係であるにもかかわらず相互に作用しているようにおもしろい。

他に、ブーニンのシヨパン、バレンボイムのモーツァルト、

またブラームスのチェロ・ソナタ、ヘンデルのハープ協奏曲、ラヴェルのボレロ等々、日常生活のなかに美しい音楽が繰り返し響いている。つまり、耳が肥えており、様々な声や音を敏感に捉えているのだ。これは短歌の韻律にも好影響を与えていると思われる。

花びらを臉のごとく重ねつつばら園のばら
昼をまどろむ

芝居絵の泥絵の血のりぬらぬらと蠟燭の火
にかびあがり

あるふかき宮古上布の夏ごろも蜻蛉あまごのはね
のすずしさに透く

かななづきもみぢさかりの山に寝てはらわ
たまでもあかく染まれり

一首目、a音の繰り返しにより、明るい昼のばら園が表現されている。三句を「つつ」でつなぎ「ばら園のばら」とりフレインすることで、読者の眠気も誘うようである。

二首目、初句二句は母音が忙しく変わり濁音も含まれており、おどろおどろしい。「ぬらぬら」というオノマトペにね

つとりとした粘着感があり、o音とu音の「蠟燭」までもねつとり感じられる。

三首目、形容詞から詠い出すことで韻律が滑らかになり、軽やかな「夏ごろも」につながる。四句の「蜻蛉」「はね」のa音の繰り返し、結句の「すずしさ」「透く」のu音の繰り返しにより、涼やかな風のような韻律を生みだしている。

四首目、ひらがな表記が多く、やわらかな印象の一首。初句でブツツと切れた感じがしないのは、この表記によるところが大きいだろう。「はらわたまでもあかく」は十音中七音がa音で、やわらかさの中に赤さを巧く表現している。

いずれも、韻律と共に色彩感覚が豊かである。色彩表現にも音楽性は重要だと感じた。

また、温かな家族詠も特長のひとつだが、この二十年あまりの間に、姉や兄、そして最愛の夫を見送ることになる。特に夫への永別の歌は胸を打たれる。

昏睡の夫のかひなあたたかしはじめて触れし彼の日のごとく

納骨を終へしまひるの山墓に風ややいでて法師蟬鳴く

さみしければ黄菊白菊植ゑならべ日のあたるさまをりをりながむ

一首目、昏睡の夫の体温を肌で感じ、言葉以外で通じ合うとする切なさがある。時空を超えた相聞歌である。

二首目、納骨という哀しい場面を聴覚で捉え、蟬声が際立つことで、他の一切の音をかき消す。

三首目、「黄菊白菊」の色彩が明るく淋しく、またリズムを生みだして音楽性もある。

夫亡き後は、次第に自らの生に向き合う時間が多くなる。いのちありて今日くぐりたり金色の花咲き垂るるミモザの下を

庖丁の薄刃で指を傷つけぬはなればなれのこころとからだ

大海の一滴の身とおもへども一滴の生もなかなか難儀

一首目、夫を見送った直後の歌。「いのち」ある意味をひしと感じながら、自然の恩寵である金色のミモザの下をくぐっている。

二首目、自らの意志と行動が一致しない現実を「はなればなれのこころとからだ」と表現。口語調のひらがな表記にすることで、すつと読者に思いが届く。

三首目、自らを「大海の一滴」と捉えるのは一般的だが、ただの小さな存在で終らず、一滴が難儀しているところに可笑しみがある。

声フェチを公言する作者は聴覚が鋭く、また自ら紡ぎだす短歌は韻律がよい。言葉の幹旋に無理がなく流麗である。声に出して読めば、その心地よさが分かるだろう。

最後に、中道操さんは四冊の随筆集を出版するなど随筆の名手である。本歌集のあとがきは十頁にわたり、声のよいあの人との恋の顛末などが活き活きと綴られている。紹介する紙幅は尽きたが、ぜひ手に取って読んで頂きたい。

短歌にまもられて

松尾祥子

『岩無きこと』は、『母は夢にも』『合歓咲く季』に続く第三歌集で、平成九年から令和二年までの作品が収められている。昭和十年に網走に生まれた矢野博士さんは、二十一歳の冬に発病（肺結核、腸結核、関節リウマチ）し、長期療養生活となる。結核性のもは快復したものの、今もなお全身の関節リウマチと闘う日々で、その間に蜘蛛膜下出血も経験している。

湯疲れの懈さにひと日茫とをり病むは罪過
を秘むるに似たる

咳込みて痰のきれざる夜はながしふとも思
へり子規を糸瓜を

点滴の一滴ごとに早春の朝のひかりを容れ
つつ清めり

一首目、「罪過を秘むる」とは、何と辛く悲しい言葉だろう。この比喩に胸を突かれ、病とともに生きて来た六十六年が偲ばれる。二首目、同じく病気に苦しんだ子規を思う。

「糸瓜」とは、その絶筆となった三句「糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな」「痰一斗糸瓜の水も間にあはず」「をととひのへ

ちまの水も取らざりき」を思い浮かべているのだろう。死がそばにあるような、ながい夜なのである。三首目、そんな床にあつて、点滴の一滴一滴に差し込む、早春の朝の光に目をとめる清らかな心に救われる気がする。

おもひきり笑ふ無かりし母の生病みたる吾
のゆゑかと思ふ

母恋のおもひは永遠にわれのみの子供の領
分誰も入るなけれ

少女期より病む吾を遣し逝き給ひし母なり
母の享年を越ゆ

母を詠んだ歌は切なく、懐かしい。一首目、懸命に娘を支え続けた母の姿が浮かび、二首目の「誰も入るな」という強い言葉に、母への深い思いと、その絆を感じる。三首目、母の享年を越えての命は、母とともにある命に他ならない。作者は療養生活中に白秋の歌集や柗二の『山西省』を読み、生と死に関わる強烈な印象を受け、昭和三十六年「コスモス」に入会したが、その背中を強く押したのは母であった。作者を見守る母の存在が歌集から滲み出る。

南極の白い砂漠を思はせてグラウンドの雪を風剝がしゆく

家ごとに雪割りに励む音温しひかりを穿ち地を穿つ音

ハイドンの「雲雀」聴きつつわれのみの春にひたれり吹雪く真昼を

物干しのロープに抛れるちさき蜘蛛春のいのちの萌黄色なり

昏れ方の庭叢にヒトならば強気のアルトで蟋蟀鳴くも

露の香を椀に満たしてこの朝を初夏の山の気吸ふごとくぬる

一首目から三首目は、函館に暮らす作者ならではの、冬の歌。一首目、「南極の白い砂漠」という比喩、「剝がす」という動詞が冬の厳しさを表す。二首目の雪割りの音を「温し」と捉え、「ひかりを穿つ」に、春を待つ喜びが溢れる。三首目、作者は一日のほとんどをCDに聞き惚れると言うクラシックファン。この歌集には聴覚の冴える歌も多く、吹雪く真昼であっても、音から春に浸っている。四首目、小さな蜘蛛を「春のいのちの萌黄色」と捉え、その命を言祝ぐ。五首目、「強気のアルト」が楽しく、音楽好きで、虫を人間と同じ仲間のように接する作者が伺える。六首目、春の遅い北国では、露は夏の香を運ぶ。一椀の露から、初夏の山の気を感じ取っている。「初夏の山の気吸ふごとく」というダイナミックな比喩がよい。どの歌からも、感覚の冴えを感じる。

鉛筆を削り揃へぬ大歳の夜の慣ひとなしきて老いぬ

「退却」を「転進」と言ひし国はまた武器の輸出を「移転」と称す

一首目、必ず毎年鉛筆を削り揃えて、新年を迎えるのだ。おそらく歌を書くために。六十一年の間、「コスモス」で歌を詠んできた作者の人となり伝わる。そして私はこの歌に、

柘二の机の上に置かれていた、削り揃えられた鉛筆を思い出す。二首目、言葉をすり替えて本質を見えなくする、この国への強い危惧。作者は、自分を律し、社会を厳しく見つめ、

きっぱりとした態度で生きている。

独りとは砦無きこと黄昏くもろこんの降りくる窓に風と真向かふ

砦無きことの自由でわが生は永遠なる「短歌」にまもられゆかん

歌集のタイトルになった歌である。一首目、二句切れの引き締まった韻律に、「独り」を嘆くのではなく、受け止めて

生きる勁さが一首を貫く。結句の「風と真向かふ」と言う力強い言葉は読者をも勇気づける。二首目は巻末に置かれた歌。

「砦無きこと」を自由と捉える潔さ、結句の「まもられゆかん」という温かさ。「永遠なる「短歌」という言葉に、読む者、そして詠む者を支える短歌の力を感じる。

歌集を上梓し、亡き母との約束を果たされたことを喜ぶとともに、これからも短歌を詠み続けられることを願ってやまない。

郷土を愛し、歌を愛す

鈴木竹志

松野功の遺歌集『塩の道』を読みつつ、かつて千国街道を何度も往復したことを思い出していた。若い頃、スキーの楽しさにのめり込んで、岐阜や長野のスキー場に何度も通った。とりわけ白馬乗鞍スキー場では、近くの定宿とも言うべきペンションに何泊もして、スキーを楽しんだ。白馬乗鞍の北隣がコルチナススキー場で、その先はもう県境であり、夏に訪れた時には、かつての千国街道、今は国道一四八号線を走って、県境を越え、糸魚川に出たこともある。だから、この歌集を読みつつ、千国街道沿いの町や村の様子、さらに北アルプスの山々の姿を懐かしく思い出していた。

「塩の道」という題名からは、この千国街道とその道筋に生きた人々、そして今も生きる人々への思いの深さを窺うことができる。また、千国街道沿いに生きる人々の姿ばかりでなく、新潟、長野の豪雪地帯に生きる人々の厳しい生活もまた浮かびあがってくる。そして、その地に生まれ、その地に生を終えてゆく人々への優しい眼差しもまた感じとることができる。まず千国街道を詠んだ歌を挙げてみよう。

ここの地も神楽絶えしか農機具の類納まれ

る来馬神楽殿
黒光る梯子に続く屋根裏の暗きま洞は牛方の寝間
土葬また庚申伝承をわれら聞き千国の家に
盆の夜更かす

小谷村の千国地区を訪れた時の歌である。千国街道沿いでも最も伝承と保存に努めている地区である。一首目で「ここの地も」と詠んでいるのは、作者も糸魚川で神楽の保存に関わっていることによるであろう。貴重な民族文化遺産が失われてゆくことへの危惧感、この歌集全体に感じられる。二首目は、千国の牛方宿を見学した際の歌である。千国街道沿いでは、この千国にしか現存していないという。三首目からは熱心に民族的伝承を聞き取る人々の姿が浮かんでくる。

舗装路を過ぎて踏み入る塩の道の足にやさ
しも落葉積もりて

街に住む少年たちが落葉積むウトウの道を
声あげて下る

継がれこし人柱伝説今の世に亡骸出づる地

すべりの村

この三首は「塩の道」と題された一連にある。具体的な地名はないが、やはり小谷村を訪れた際の歌ではなからうか。

二首目の「ウトウ」については、詞書きで「ウトウとは、人と牛の往来によってできた窪んだ道。」と記している。いずれも「塩の道」への思いの籠もった歌であり、「塩の道」の過去と現在を丁寧な詠んだ秀歌である。

この歌集に収められている歌には、歌人はほとんど詠まれているが、「宮柵二先生」と題された三首が収められている。次の三首である。

御夫人が道化たまへば時としてお髭が笑ま

ふ柵二先生

ふきのたうの色の緑きを右の手にかぎつつ

しばし黙します師は

新潟に帰る我らを長き廊下に見送りたまふ

先生ご夫妻

全国大会での宮先生夫妻との出会いが詠まれているが、宮先生、英子夫人のそれぞれの姿が彷彿としてきて、私のように宮先生と直接お会いしていない者としては、実に羨ましい歌である。特に二首目の歌は、宮先生を詠んだ歌の中でも傑出した優れた歌ではないかと思う。宮柵二という歌人の姿が見事に浮かび上がり、宮柵二という歌人の背後に漂う孤独感すら感じられるのである。次に郷土の歌人相馬御風に関わる歌が収められているので、何首かを紹介したい。

御風先生の書斎の床にすずしげな良寛像の

眼差しに会ふ

「春よ来い」のチャイムの調べ夕焼けの街に散華の如く降りくる

祖父もまた叔父も一期を生活の歌を詠みに

き「木蔭歌集」に

相馬御風は、糸魚川生まれの歌人、詩人である。東京での文芸活動を終えて大正五年に帰郷し、その後は良寛研究に勤しみ、生涯を終えるまで糸魚川を離れることはなかった。また糸魚川では、「五秒チャイム」で御風の作詞の童謡を毎日流している。二首目の歌はこのことを詠んでいる。町ぐるみで相馬御風の顕彰に努めているのである。そのことに誇りを抱いているからこそ歌は詠まれたのである。三首目には、「木蔭歌集」が登場するが、この雑誌も御風主宰の雑誌であり、若き日の宮柵二も投稿していた。その雑誌に祖父や叔父も投稿していたというのだから、縁を感じざるをえない。最後に家族を詠んだ歌を紹介したい。父親と妻を詠んだ、それぞれ味わい深い心のこもった歌である。

我のする野良仕事をば窓越しにじつと目守

れり常臥す父は

妻は眼をわれは臍臓わづらひて老いても楽

し病院デート

二首目は、深刻な状況にもかかわらず、軽妙に詠むところに、作者の強い覚悟が感じられる歌である。骨格がしっかりと書いておられることのない歌の数々に会えたことに感謝してこの稿を終えることとする。